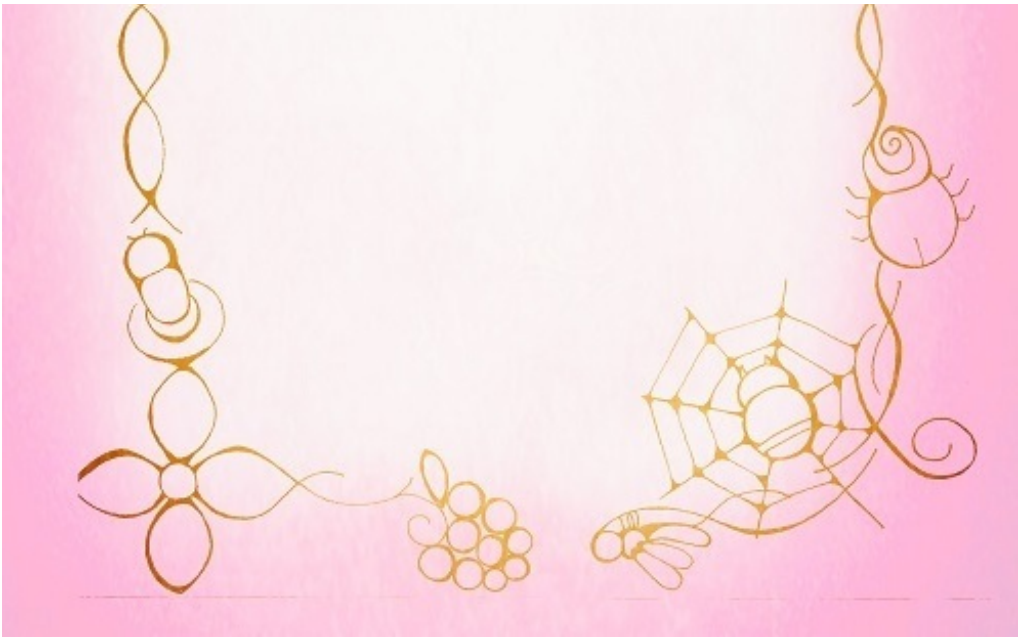
ともだちに
なりたくて
Picture book artist Nakatu yoichi

ともだちに
なりたくて。

大きな山と
そのまた大きな山をこえた
小さな山のてっぺんに
ジニーは住んでいました



ジニーに友達はいませんでした
”いろんな虫たちと友達になりたい”
いつもそう思っていましたが
ジニーに近づく虫たちはいませんでした

それどころかジニーが近づくと
虫達は恐がり
その場から消えてしまうのでした

だってジニーは　”くも”　だから、、、

みんながねしずまった夜
ジニーは毎晩下に降りてきては
花のみつを吸ってみたり
葉っぱを食べてみたり
木のじゅえきをのんだりしました

同じようなことをすれば
いつかきっと
自分もみんなと同じようになれる
そう思っていたのです

朝がくるたびに
”今日こそは　今日こそは”　と
水たまりにうつる　自分を見るのでした
でも　そこにうつる自分は

いつもの　くものジニーでした
ジニーはあきらめかけました

「僕はもう　このままかな
僕はどうがんばっても
きっと　”くも”　のままなんだ」と。

ある朝　シューはいつものように
外をながめていると

「たすけてー　だれかたすけてよー」

という声が聞こえてきました

それは一匹のてんとう虫くんでした

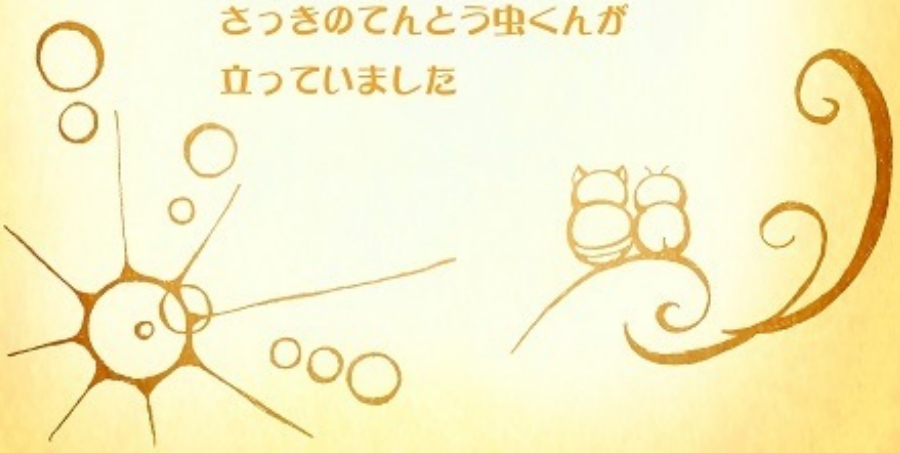
あばれている　てんとう虫くんに
ジニーは何も言わず近づき
絡まった糸をほどいてあげました

そのとたん
てんとう虫くんはにげるように

空 高く とんでいってしまいました

逃げられてるのは　いつものこと
どんな虫をたすけても
もう戻ってはこないと
そう思っていました

「ごめんなさい
おれいも言わずいっちゃって」
ゆっくり　後ろの方をふり向くと
さっきのてんとう虫くんが
立っていました



「君、名前なんて言うの？」
「僕、僕はジニーって言うんだ」
「そっか　ジニー。
僕はボビーって言うんだよろしくね」
「君は僕がこわくないの？」

「君は僕がこわくないの？」

「はじめはね。　でも今はこわくないよ

だから僕は戻ってきたんだ。

”君のともだちになりたくて”

ジニーのひとみからはいつもとは違う

涙がこぼれおちるのでした。

それから　ボビーは毎日
ジニーに会いに行きました
ジニーとボビーが親友になるまで
時間はかかりませんでした

夜空いっぱいにかがやく星空の下
ボビーはジニーに自分の
夢のはなしをしました
ジニーはほほえんで
ボビーの話を聞きました
そして　ボビーはジニーに言いました
「ねえ　キミの夢も聞かせてよ」

ジニーは木からおりてきて　言いました
「僕の夢はこれだったんだ」
そこから見たのは　虹色に輝く糸でできた
虫たちと　それを包む星たちでした

「君の夢　きっとかなうさ」
「いいや　僕は夢以上のものを手に入れたよ」
「それは君という親友さ」
そう言う　ジニーのやさしい横顔を見て
ボビーはジニーの夢をかなえてあげようと
決めるのでした

その次の朝から
ボビーはとびまわりました

自分のいいところも　わるいところも
すべて受けいれてくれる
”最高のともだち”
の夢をかなえたくて、、、

いくつかの朝をむかえて
ボビーは　ジニーの夢を届けに
やってきました。
歌だって自然にこぼれています

「ジニーよろこんでくれ
君の夢がかなう日がきたんだ」

ボビーの後ろにかくれていた虫たちが
ゆくりと顔をだします。

でも　ジニーはじっとして動きません

「そっか　きみは泣き虫だからな
また　泣いているんだろ」

ボビーはジニーの肩を
”ポン”とたたきました
けれどジニーは二度と
動くことはありませんでした

「きみは　ぼくらと
ともだちになりたくて
だから、、、」

「ねえ　そうだろう、、」

ボビーの言葉を聞いた虫たちは
その時　はじめてジニーの心にふれて
ジニーの優しさに気づき
いっせいに　泣きだしました

「ジニー　ジニー」
ボビーは何度も　何度も
名前を呼びつづけました
何も言わないジニーを見て
ボビーは声をあげて泣きだしました
はじめて会った日のこと
ふたりで笑いあったこと
ふたりで語ったあの夜のこと
涙と一緒にあふれては
とまりませんでした。

こぼれ続ける涙をぬぐおうとした
その時です

虫たちが流した涙が
浮かびあがり
下へ落ちることなく
空高く　空高く

つかんでいきます

そして　ジニーも
みんなが流した涙に
導かれるように
空高く、たかく
のぼって行きました

みんなが空を見上げると
数えきれないほどの星空の中で
ジニーと虫たちが楽しそうに
遊んでいました
その様子をみて
ボビーはつぶやきました

「ジニー　君の夢は

叶ったんだね」

☆ 手紙（てがみ） ☆

ボビーへ

やさしい キミは 心のままに ともだちを愛し
涙をながしたんだね
でも やさしく手をさしのべたキミのことを
ずっと大好きで ずっとしあわせ だったはずだよ

ジニーへ

キミは 一人ぼっちなんかじゃないよ
あきらめない キミのすがたをちゃんと見てるよ。
だからチャンがキミのまえに そっとうまれてくる
なにげない 一日のなかにキセキはまっているんだよ。
そして キミは だれかを愛するおもいが
あふれるあまり みんなをクモの巣からほどいて
あげたんだね でもね キミはお腹がすいていたことに
気づいていたかい?

キミへ

みために とらわれず あいてのやさしさや あたたかさに
気づける心を みんなが持っている。
ぼくはキミのそのあたたかい心をみつけたよ
悲しいとき苦しいとき忘れないで キミを愛しつづけて
いる そんざいが いることを…。

中津陽一より